



かがわ 瀬戸内 島 物語

(公社) 香川県観光協会

〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1-10
TEL:087-832-3377 FAX:087-861-4151

うどん県旅ネット

検索



日本橋より長崎迄道中記（江戸時代 18世紀）香川県立ミュージアム蔵



かがわ瀬戸内島物語

「かがわ瀬戸内島物語」について

日本で初めて国立公園に指定された瀬戸内海国立公園。その東側に位置するのが、香川県海域です。美しい海に点在する島々には、いにしえからの歴史があり、固有の文化が守られてきました。島に残る歴史は、代々島人に語り継がれてきたもの。日本史のダイナミックな時代の変遷につながりながら、島人の純朴な心やたくましい生き方が伝わってくるような物語の数々です。

近年、三年に一度の「瀬戸内国際芸術祭」でにぎわう香川県の島々ですが、その島が本来持っている歴史や文化も含めた「せとうちアート」を紹介するために、島巡りのガイドとなる本誌を制作しました。『かがわ瀬戸内島物語』、古くて新しいアートの発見、時をさかのぼる島旅の始まりです。

太古の瀬戸内海には海がない？！

香川県に人が最初の足跡をしるしたのは、およそ二万年前。当時の瀬戸内海は最終氷河期を迎え、海ではなく陸地が広がっていました。ほぼ現在のような姿になったのはおよそ七五〇〇

年前。貝などを食糧にした海辺の集落もあり、三豊市の小鷲島からは、縄文時代早期（約八〇〇〇年前）の貝塚が発見されています。坂出市の金山から出土されるサヌカイトは石器として優れており、その搬送ルートであった島々（当時は山地）には、早くから人々が住みつきました。それは、ちよūd瀬戸大橋架橋の島々に重なります。

鬼や悪魚が出没する舞台に

やがて弥生時代、島の人々は土器を使って塩づくりを行いました。古墳時代、瀬戸内海の海上交通は盛んに行われ、まさに文明のシルクロードとしてさまざまなものが行き交ったことでしょう。直島諸島の荒神島には、海上交通の安全を祈ったと考えられる祭祀遺跡が残されています。また、喜兵衛島には、国の史跡である「喜兵衛島製塩遺跡」があり、六、七世紀、生産集団によって塩づくりが行われていたことを物語っています。

その瀬戸内海で、讃留霊王の悪魚退治伝説が生まれ、桃太郎や浦島太郎のモデルとなるような出来事が起こったのかもしれない。

か 見れども飽かぬ 神柄か ここた貴き…
という柿本人麻呂の歌が記されています。

海の時代

その後、貴族の世の中から武士の世の中へと、日本史が大きく変動する時代も、瀬戸内海は重要な役割を果たしていました。室町時代には商工業が盛んになり、それに伴って「海の時代」といわれるほど海運による物資の輸送が活発になりました。また、戦国時代になると、時の権力者たちは制海権を握ろうと必死に努めたのです。

江戸時代になると、瀬戸内海を行き交う船はますます多くなります。西廻り航路が開かれ、瀬戸内海から能登や佐渡、さらには蝦夷地まで往来しました。これにより、東北や蝦夷地からは昆布などの水産物や米が運ばれ、瀬戸内海のは

文化の先進地

古代の瀬戸内海は、都と大宰府という重要拠点を結び、防人や地方へ向かう役人たちも行き交いました。朝鮮や中国への使節団もここを通り、瀬戸内海はいち早く最先端の文化を伝える「海の道」だったことでしょう。そして、島々はそれらを取り込む流行最前線の地であったのかもしれない。

船の多くは島々の浦にも立ち寄り、その風景に心打たれ、歌を詠んだ人もおりました。



沙弥島のナカンダ浜

『万葉集』には、「玉藻よし 讃岐の国は 国柄

島々からは塩などが積み出されました。

そうして、豊かになった島々では、農村歌舞伎や文楽なども上演されました。この時代、日本一の海の神さまと称される「こんぴらさん」への参詣も盛んに行われ、「金毘羅船」と呼ばれた帆掛け船も瀬戸内海を渡ります。また、「渡海船」と呼ばれた小舟も島々をつないでいました。新幹線も飛行機もなかった時代、島々は重要な交通の要だったのです。

世界に開かれたアートの島々

こうして、文化の大動脈であった瀬戸内海は、二十一世紀、再びアートの舞台としてよみがえります。かつて文人墨客が旅をし、歌や書に、小説や絵画に残されてきた瀬戸内海。世界の文化を取り入れてきた歴史を礎に、世界の現代アートを受け入れ、新しい時代を築く瀬戸の島々です。



日本橋より長崎迄道中記（江戸時代 18世紀）香川県立ミュージアム蔵

かがわ瀬戸内略年表	
20000BC 旧石器時代	瀬戸内海は旧石器時代を通じて陸地化していた。サヌカイト石器の使用が始まる。
8000BC 縄文時代	瀬戸内の海化が進み、縄文生活が始まる。
400 頃 古墳時代	荒神島で海上祭祀始まる。
450 頃	島しょ部で方墳などが築造される。
530 頃	島しょ部を中心に製塩活動が盛んになる。
774 宝亀 5	空海（後の弘法大師）、多度郡にて誕生（宝亀4年説あり）。
888 仁和 4	讃岐の国司菅原道真、城山にて降雨を祈る。
940 天慶 3	藤原純友ら海賊を率い、讃岐国に襲来。
1156 保元 1	崇徳上皇、保元の乱に敗れ、讃岐へ流される。
1185 元暦 2	源平屋島合戦がおこる。
1207 承元 1	法然、流罪となり、塩飽に滞在する。
1339 延元 4・暦応 2	佐々木信胤、南朝を奉じ小豆島に拠る。
1445 文安 2	この年、宇多津・塩飽・小豆島などの船が、塩や米などを載せて兵庫北関を多数通関する。
1577 天正 5	織田信長、堺に入る塩飽船の安全を保障する。
1586 14	小西行長の依頼により、セスペデス神父が小豆島を訪れる。
1590 18	豊臣秀吉、塩飽の領知を船方案に認める。
1605 慶長10	片桐且元、小豆島で検地を行う。
1620 元和 6	大坂城築城のため、小豆島・塩飽などから石材を搬出する。
1671 寛文11	直島領主高原氏が改易され、それ以後、直島・女木島・男木島は幕府の直轄地となる。
1798 寛政10	塩飽勤番所が完成し、朱印状を移管。
1804 文化 1	小豆島草加部村の高橋文右衛門、大坂に醤油を出荷。
1837 天保 8	小豆島西部6力村が津山藩領となる。
1860 万延 1	塩飽出身者35人、咸臨丸乗組員として浦賀を出港、アメリカに向かう。

小豆島ものがたり

おうじん 応神天皇、 あづきしまにあそぶ

じんこう
神功皇后も立ち寄った島

高松港からフェリーで約一時間、播磨灘に面した小豆島。日本に伝わる最古の正史『日本書紀』では、応神天皇が詠まれた歌の中に「阿豆枳辞摩（あづきしま）」として記されています。また、現在は香川県最大の島として知られていますが、古くは備前国児島郡（現在の岡山県）に属していました。この島には応神天皇が行幸したと伝わり、エピソードの数々は、今も史跡として残されています。



蕪崎（かぶらざき）
土庄町四海（しかい）の浜に突き出た蕪崎。ここで神功皇后の船団は、嵐を鎮めるために神楽を奉納したと語られてきました。

子です。皇后は応神天皇を身ごもった体で朝鮮半島に遠征し、筑紫（現在の福岡県）に帰って、応神天皇を出産したと伝わります。この神功皇后の伝説も瀬戸内沿岸や島々に多く、小豆島も皇后が立ち寄った島とされています。

紅葉の寒霞溪
応神天皇が鉤をひっかけながら登ったという伝説が残る寒霞溪。そこまで登りたくる絶景の渓谷。今ではロープウェイで手軽に渓谷美を楽しめます。



地名に残る応神伝説

『日本書紀』の応神天皇の巻によると、「天皇は淡路島へ狩猟にいかれ、ついで吉備の国に行き、小豆島に遊幸された」と記されています。天皇が最初に上陸したのは、小豆島の西端にある伊喜末の浜。天皇が息をすえて休息したことから「いきすえ」と呼ばれるようになったとか。さらに、洲崎で本格的に島に上陸したので、それを伝える石碑が建てられています。現在はずいぶん内陸部になりました。その近く、宝生院の場所に行宮を構え、天皇がお手植えしたというのが、推定樹齢一六〇〇年以上、国特別天然記念物「宝生院のシンパク」です。

応神天皇の伝説は、島の地名と深く結びついています。有名な景勝地「寒霞溪」は、あまりにも険しい崖であつたので、天皇が岩に鉤をかけて

四年・暦応二年（一三三九）に小豆島を本拠地として、南朝のために功をあげましたが、その後、北朝の細川師氏（あそがもろうじ）が阿波・淡路・讃岐・備前四カ国の大軍をもって来攻し、まる一カ月間の合戦の末、信胤は降伏しました。

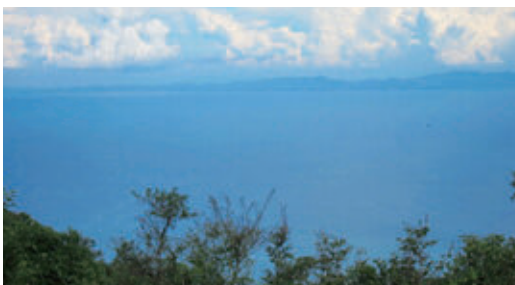
島の伝説では、この戦いで信胤は討ち死にしたことになっていますが、実際は細川氏の被官（家臣）となり、富丘八幡の造営などを行ったようです。けれども、正平十七年・貞治元年（一二六二）南朝方の細川清氏と北朝方の細川頼之が坂出の白峰の麓で戦った際、北朝方として加わったという記録を最後に、その消息は途絶えてしまいました。

小豆島では、「城崩れ」という星ヶ城落城の伝説が語り継がれ、盆踊りである「安田おどり」では信胤とお妻の局の悲恋が歌い込まれています。

佐々木信胤の廟
安田地区の玉姫神社境内にある「佐々木信胤の廟」。明和5年（1768）、安田村の有力者の夢の中に白装束の信胤が現れ、この辺りに廟所を建ててくれと告げたという伝説があります。



信胤の居館跡
JA香川県内海支店の敷地内には、佐々木信胤の館跡があり、祠にまつられた竹成（たけなり）御前は信胤の息女という伝承があるそうです。



星ヶ城からの眺望
小豆島最高峰の星ヶ城山、別名嶺岨（けんそ）山にあった星ヶ城。天嶮の要害を利用した中世の山城で、本城の西峰には一の木戸（表面）、空壕（からぼり）、土壇（どたん）、曲輪（くるわ）、居館跡、土塁らしき遺構があり、鉄滓（てっさい）が多く出た鍛冶場跡もあります。東峰の詰の城にも天然の湧泉や人工井戸、土塁、居館跡、石塁、祭祀跡、舟形遺構とみられる多くの遺構が残されている他、山頂は美しい星空が見られるスポットとしても知られています。



湯船（ゆふね）の水
小豆島霊場第44番札所湯船山の境内にある「湯船の水」。こんこんと湧水があふれ、周囲の千枚田も潤ってきました。ここは、佐々木信胤が仏堂を造営したとされ、お妻の局を住ませた別荘ともいわれています。



お妻（オ）の局社
館跡から道路を挟んですぐ前、安田自治会館の敷地内には「お妻の局社」があります。近くの畑の中にあつたお妻の局の墓という五輪塔を移したものと伝わります。

登ったことから「鉤かけ山」、それが「神懸溪山」と呼ばれるようになったとか。小豆島オリブ公園の近くにある「鬼ヶ崎」は天皇のお荷物が先に着いたので「御荷が崎」から変遷した地名。醬の郷がある「馬木」は、天皇の仮宮が馬目の木のそばであつたことから名付けられたなど、多くの伝説が語り継がれてきました。



宝生院のシンパク
日本最大といわれ、根元の周囲は約16.6m、樹高約20m、神々しいほどの大樹。

富丘八幡神社
応神天皇や神功皇后をご祭神とし、天皇ゆかりの地に建立されているのが、内海（うちのみ）、菰田（ふきた）、伊喜末、富丘、亀山の各八幡神社であり、「小豆島五社八幡宮」と呼ばれています。

星ヶ城の恋物語

上官の愛人に恋をした？

平安時代の小豆島は皇室御領として治められていました。そして、南北朝時代の争乱期、備前国児島郡飽浦の武将であつた佐々木信胤が南朝に味方し島の星ヶ城に立てこもりましたが、北朝方の細川氏に敗れ、しばらくは細川氏が小

隠れキリシタンの島

キリスト教の先進地

十六世紀後半、布教のために宣教師たちが瀬戸内海を行き来するようになりました。天正時代の初め（一五七三）頃、宣教師カブラルが日本人の修道士ジョアン森を伴って、塩飽諸島の本島に立ち寄り、滞在していた宿の女性がキリスト教に帰依しました。その人物が、讃岐における最初のキリシタンとされています。

豊臣秀吉の時代、小豆島は「蔵入地」と呼ばれる直轄領でした。天正十三年（一五八五）、秀吉の命を受けた小西行長は小豆島塩飽を支配することになります。行長は、小豆島にもキリスト教を広めるため、宣教師を派遣してくれよう依頼し、翌年にセスペデス神父が大坂からやってきました。そして、一カ月間で一四〇〇名に洗礼を受けさせたということです。

キリシタン禁制の時代

このように、島のキリシタンはその数を増していきましたが、天正十五年（一五八七）、豊臣秀吉は最初のバテレン追放令を出します。そこで、宣教師オルガンチノ神父とキリシタン大名として著名であつた高山右近らが、行長の計らいで小豆島に身を隠し、翌年に行長が肥後国宇土に転封となるまで、この地で潜伏していました。この一時期、小豆島は日本におけるキリスト教の重要



カトリック小豆島教会
小豆島教会の前には、大阪教区玉造教会から移設された高山右近像があります。
また、教会の敷地内には、天正14年7月23日に小豆島に初めてキリスト教が伝来してから400年を記念する石碑が建てられています。

な場所の一つであったといえるでしょう。

その後、江戸時代となり、慶長十九年（一六二四）には、幕府がキリシタン禁制を始めますが、その後も信者は増え続けました。けれども、島原の乱が起こつてからは、信者か否かを見極める宗門改めがさらに厳しくなり、やがて、キリシタンから改宗した後も、家族を含め代々監視されることとなります。延享三年（一七四六）の調査によると、小豆島には七十人の元キリシタンやその家族がいたということです。



キリシタン灯籠
中山地区は高山右近の潜伏地であったといわれており、キリシタン灯籠が残っています。
また、湯船山には、錫杖が十字に刻まれた石像があり、キリシタンに関わるものではないかといわれています。

支配の変遷

備前と讃岐のはざま

奈良時代や平安時代の小豆島は備前国児島郡に属し、平城京出土の木簡や平安時代初期に編さんされた『続日本記』にもその名前が見えます。南北朝時代には、讃岐守護の細川氏との関わりが深くなり、備前国でありながら実質的には讃岐に属するようになり、応永年間（一三九四～一四二八）以降は、讃岐の守護代であった安富氏が島を支配していました。

その後、豊臣秀吉の時代に直轄地となり、小西隆佐や行長が統治。江戸時代には天領として堺奉行所や伏見奉行所、大坂奉行所などが管轄す



慶長小豆島絵図（県有形文化財）個人蔵
慶長10年（1605）、片桐且元の指揮のもと作成された小豆島最古の絵図。備前側から見た描かれ方がされており、南が上になっています。

空海の霊跡

小豆島八十八ヶ所霊場

現在でも、熱い信仰が寄せられている「小豆島八十八ヶ所霊場」。千年の昔、空海（弘法大師）が讃岐と都を行き来する途中に立ち寄られ、修行を積まれた霊跡であると語り継がれてきました。

島ながら、険しい山がそそり立つ小豆島は、空海が好んで踏破したような山岳修行の場も多く、波が打ち寄せる浜辺や野辺の庵など、札所の風景も多彩。四国霊場のおよそ十分の一といわれるほぼ三十八里（一五〇キロ）の道のりに、八十八の本霊場に加え、奥の院を含め九十四カ所の公認霊場があります。昔は春秋の彼岸の行事であったという霊場めぐり、今では一年を通じて多くの人々にぎわっています。



第1番札所洞雲（どううん）山の夏至観音
山岳霊場5,000坪の境内には、弘法大師の杖により湧き出たという「大師お杖の水」と称する泉があります。毎年、6月初旬から7月中旬の晴天時の15時頃、太陽の光で岩肌に出現する「夏至観音」を拝むことができます。



第2番札所基石（いし）山
洞雲山の参道入口から車道を上に行けば、自然の洞窟を本堂とした第2番札所基石山があります。さらに登れば、険しい断崖の上に不動像が見えます。ここから望む内海灣はまさに絶景。



第60番札所江洞窟（こうどうくつ）
弘法大師が悪魔を封じ込めたという伝説があり、首から上の病に利益ありといわれています。13の仏様が集まったパワースポット。



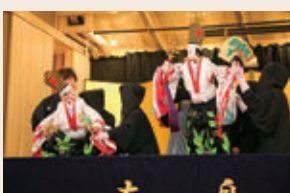
島々の娯楽

小豆島では宝永三年（一七〇六）に土庄で芝居を上演したという記録があります。全島に広がるのは文化文政年間（一八〇四～一八三〇）頃以後といわれ、幕末には小屋がけを含めて一四六もの芝居舞台があったそうです。島で生産された塩・石材・そうめん・醤油などが大坂に運ばれていたの、運搬に従事していた人々によって、上方の文化が島に伝わりました。それは、やがて島民が自ら演じる農村歌舞伎へと発展していきました。

江戸時代には天領であった直島も芸能が盛んで、城山には回り舞台やスッポン*がついた歌舞伎のための豪華



絵本競かくしの紅翅（べにがき） 瀬戸内海歴史民俗資料館蔵
歌舞伎の脚本である「根本（ねほん）」。明治期の小豆島の役者嵐璃當（あらしりとう）が所持していました。



直島女文楽（県無形民俗文化財）
（写真提供：直島町教育委員会）

な舞台があったそうです。八十八夜の鯛網の頃、網元が淡路島から文楽の一座を招いたのが始まりとなったのが、現在も伝わる全国で唯一、女性だけの「直島女文楽」。また、塩飽諸島の本島には、文久二年（一八六二）に建立された芝居小屋「千歳座」があります。前面が大きく開いた構造など塩飽大工の技術の高さを物語ります。平成元年（一九八九）に修復され、芝居公演などを行うことができます。



中山農村歌舞伎舞台（国重要有形民俗文化財）
農村歌舞伎が行われる中山の舞台は、氏神である春日神社の境内にあり、神社の本殿と相対しています。江戸時代後期の建立と考えられ、文政6年（1823）の雨乞芝居上演の墨書などが残されていました。
小豆島で農村歌舞伎が始まったのは18世紀の初め頃で、神社の境内などに舞台が建てられたのは、18世紀末頃と考えられています。

※スッポン…奈落から役者をせり上げる装置

農村歌舞伎衣装 瀬戸内海歴史民俗資料館蔵
小豆島町福田地区で使われていた農村歌舞伎衣装。



小豆島と豊島の石めぐり

小豆島と大坂城

豊臣秀吉の時代、小豆島は小西行長に続き、直参家臣であった片桐且元が代官となり、関ヶ原合戦後も豊臣家の支配が続きます。

慶長二十年、大坂夏の陣で豊臣家が滅亡した後は江戸幕府の天領となり、水主御用を命じられ、元和四年（一六一八）からは小堀遠州が統治を任せました。そして、翌年、徳川幕府二代将軍である秀忠が、全国の大名に大坂城再建の命を下しました。これに併せ、遠州は大坂城作事奉行に登用され、小豆島は築城の重要な役目



大坂城残石記念公園に並ぶ石材
大坂城築城に当たり、多くの石が小豆島の港から積み出されました。中には運ばれることなく港に残された石も。土庄町小海にある大坂城残石記念公園には、島の石にかかわる資料や運搬に使われた道具なども展示されています。

大天狗岩（おおてんぐいわ）
残石総数が1,600を超えるという小豆島岩谷の大坂城石垣切丁場跡（国史跡）。中でも最大級の規模を誇る「天狗岩丁場跡」では、高さ17.3m、幅7.8m、奥行き12.3m、重量1,700tともいわれる巨石「大天狗岩」を見ることができます。

を担うことになるのです。幕府は、秀吉築城の城よりも大規模な計画を立て、大名たちは石垣に用いる石の工面に頭を悩ませました。大坂周辺だけでは間に合わず、瀬戸内海沿岸や島々にも石丁場が求められることになりました。

大名ゆかりの石丁場

そこで、小豆島からも多くの花こう岩が切り出されて行きました。その石丁場は島中に点在し、例えば千軒と小瀬に肥後熊本藩主加藤家、小瀬に豊前小倉藩主細川家と豊後竹田藩主中川家、大部に出雲松江藩主堀尾家、福田に伊勢津藩主藤室家、岩谷に筑前福岡藩主黒田家、石場に筑後久留米藩主田中家のものがあつたと伝えられています。

その後、小豆島の石は、江戸城の普請や京都の五条橋、大坂の住吉大社の鳥居などにも使われており、特に明暦三年（一六五七）の江戸の大火の後には、江戸の町並み再建や山王神社の鳥居にも利用されました。幕末には、大阪湾



滝宮八坂神社の牛の石像
土庄町滝宮地区にある滝宮八坂神社には、豊島石で造られた牛の像があります。この地は700年頃の文武天皇の時代、官牛放牧、つまり国営の牧場がありました。ちなみに、現在話題のオリブ牛は、ここ滝宮地区で誕生しました。

悠久の時間が支える小豆島の石文化

小豆島町「世界遺産化」対策室 学術専門員 川宿田 好見さん
日本列島の形ができたのは約一三〇〇万年前頃の火山噴火により、ダイナミックな島の山が造られ、それから長い年月を掛けて侵食された結果が寒霞溪などの絶景です。

有史以来では、大坂城築城における小豆島の活躍が見逃せません。多くの石材が小豆島から切り出されましたが、その積み込みや輸送方法はいまだに謎の部分が残っています。石一つとっても壮大なロマンが眠る小豆島です。



重岩（かさねいわ）
[問い合わせ]
小豆島町 企画振興部
☎0879-75-1800



家浦八幡神社の石鳥居（県有形文化財）
豊島にある家浦八幡神社の鳥居には「干時文明六天甲午霜月十五日」とあり、室町時代の文明6年（1474）に豊島石で造られたもので、現存する香川県最古の石鳥居です。豊島石は加工しやすくコケが付きやすいので、石灯籠や庭石に珍重されました。

の和田岬に据えられた砲台の基礎などにも使われたということです。このように、江戸時代を通じて重要な石の供給地になっていました。

さらに、小豆島と直島の間に位置する豊島では、大坂城築城のために、肥前佐賀藩主鍋島家の石丁場が拓かれました。また、室町時代から石造物に利用され瀬戸内を代表する石材の一つ「豊島石（角礫擬灰石）」は、桂離宮など庭園の灯籠に使われてきたということです。



大坂城石垣石切小瀬原丁場跡（県史跡）
残された石の幾つかには、切り出す際につけられた見事な矢穴の跡があります。

寒霞溪の奇岩の風景をはじめ、大観望と呼ばれる四方指の展望台など興味深い石の風景がある小豆島。板状摂理の檀山がある豊島とともに、石丁場の歴史を踏まえて、今なお豊かな石文化が伝えられています。

醤油の郷（ひしおのさと）
小豆島安田地区から坂手港に向かう県道沿いは、「醬の郷」として知られています。醤油の香り漂う町並みには、経済産業省の近代化産業遺産にも認定された醤油蔵が軒を連ねています。



島の産物

塩と醬の歴史

弥生時代から塩づくりが盛んに行われていた小豆島には、明応九年（一五〇〇）頃の塩浜経営を示す古文書が残されています。天正年間（一五七三～一五九二）には播磨国から塩浜師（塩を作る職人）が移住し、草加部村の馬木で入浜式の製塩を始めたといわれています。慶長十年（一六〇五）以降は大坂城に塩を納め、小豆島の塩は「島塩」と呼ばれ、京都や大坂方面にも売り出されました。

桶仕込み
醬の郷では、国の登録有形文化財である蔵の中で、100年以上の歴史を持つ木桶で仕込む醤油づくり「桶仕込み」を見ることができます。小豆島には、現在も約1,000本の木桶が現存し、全国最多の保有数を誇っています。

木桶は大きなものだと直径約2.3m、高さ約2m。古い木桶は醬の郷のオブジェとして点在しています。



そうめんの歩み

小豆島ではそうめんづくりが盛んです。ごま油を使い丁寧な門干ししてつくられる島のそうめんは味が良く、一年を通じて人々に愛されてきました。

その始まりは、十七世紀頃という言い伝えもありますが、定かではありません。寛延三年（一七五〇）に幕府勘定所の視察があり、その調査ではまだ農家の手仕事程度であったことが分かります。これが盛んになったのは江戸後期。島でそうめんを買い付けた廻船が、唐津や長崎で下ろしたという記録も残されています。また、池田村を中心に土庄、淵崎などのそうめん問屋は早くから一種の組合を結成し、価格などの取り決めを行っていました。



負い縄そうめん
島内の一部には、そうめんをのれんのように編み上げて飾る「負い縄そうめん」と呼ばれるお盆の風習があります。お盆に帰ってきたご先祖が、このそうめんでお供え物を背負って帰るようにと作られてきたそうです。



直島と高松の島々

崇徳上皇が名付けた島

かもめじまから

備讃瀬戸の北東に浮かぶ直島は、三つの有人島と多くの無人島からなり、その昔から「直島二十七島」と呼ばれてきました。島の名前の変遷には、次のような伝説があります。

古くは「加茂女嶋」「名賀嶋」などと呼ばれていたが、神功皇后が朝鮮半島に遠征の際、この島で吉備の軍勢が集結するのを待ったことから、「待嶋」（真知嶋）と呼ばれ、その後は弘法大師が「真嶋」に改めたとか。そして、讃岐に流された崇徳上皇が、島民の純真な心に感激し、「直島」と呼ぶようになったと語られてきました。



崇徳天皇神社
直島に滞在したという崇徳上皇を祭神とした神社。社記によれば、上皇が崩御された翌年の永万元年（1165）8月26日、島人が行在所（あんざいしよ）の近くに小さな祠を建て、上皇の霊を慰めたのが始まりということです。

琴弾（ことひき）の浜
現在は「琴弾地（ことひき）海岸」と呼ばれている浜の由来は、崇徳上皇が貝を拾っていると、姫君が琴を弾いて慰めたことと伝えられています。上皇が詠んだ歌として「松山や松のうら風吹きこして しのびて拾う 恋忘れ貝」の碑も近くに建てられました。なお砂に埋もれた鳥居は恵比須神社のもの。以前は、鯛網の網元衆がここで宴会をしたり、芝居などの上演が行われていたそうです。



上皇の忘れ形見

直島では、保元の乱（一一五六）に敗れた崇徳上皇が四国に流される途中、この島で過ごしたと伝えられています。鎌倉時代前期に著されたという軍記物『保元物語』には、「国司が既に直島に御所を造っていたので、そこに立ち寄って住まわれています。垣をめぐらし、日々三度の食事をもちする」と記されています。



大三宅（おおみやけ）住宅〈国登録有形文化財〉
村の三宅姓の最高位にある家柄を尊称したという「大三宅」は、代々庄屋を任命され、その住宅は明治初年まで倉敷代官に仕える村の役所でもありました。現在は文化財の和室を利用した民宿が営まれています。

郡司である香西氏が、直島にある京ノ上臈島で戦い、海賊を降伏させ、百余人を捕虜として献じたので、北条執権はこのほか喜び、讃岐諸島の警護を命じた」という内容の文章が記されています。一説には、その子孫が直島を治めた高原氏と伝わります。

戦国時代になり、羽柴秀吉の備中高松城水攻めにおいて、直島の高原次利が参戦し、塩飽の宮本氏と共に、毛利水軍に対する海上警護の任にあたりました。その結果として、天正十年



高原城跡
本村の東の丘にある高原城（直島城）跡。現在は土塁などが残っています。寛文11年（1671）に御家騒動で高原家は改易となり、城は荒廃。さらに、天明元年（1781）の大火により焼失したということです。その後、城跡に歌舞伎舞台がつくられ、戦前まで盛んに上演されていました。



高原氏の墓標群
護王神社の近く高原氏が再興したという高原寺の墓地には、初代次利の立派な五輪塔などが残されています。

現代アートと融合した歴史の島

直島町文化財保護審議会 会長
観光ボランティアガイドの会
川田 正さん



高原寺跡
【問い合わせ】
直島町観光ボランティアガイドの会
☎087-892-2299（直島町観光協会）

今やアートの島としてにぎわう直島は、卑弥呼の時代からの歴史があります。また、本村地区には、戦国乱世を生き抜いた高原氏の城が築かれていました。城を守るように寺があり、その名残が家プロジェクトの南寺、かつての中寺である極楽寺、また、廃寺として小さな庵が残されている北寺の高原寺です。

直島で、アートと歴史ガイドをぜひ楽しんでください。

（二五八二）以降、直島・男木島・女木島の所領が認められます。さらに、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いでは、高原次勝が東軍に加わり、江戸時代になっても変わらず直島など六〇〇石を治めることになりました。その後、寛文十一年（一六七二）まで、高原氏の直島支配は続きます。アートの町並みとして知られる本村は、高原氏の城を中心に形成されてきたのです。



八幡神社の石鳥居
〈県有形文化財〉
八幡神社参道入口に建つ明神鳥居。直島産の花こう岩でできており、高さ3.86m、柱の直径50cm。八幡神社は高原次勝が慶長6年（1601）に再興したと伝わります。懸額裏の刻印から、その翌年の建立ではないかと推測されています。



鬼ヶ島大洞窟
女木島にある長さ400m、面積4,000㎡の大洞窟。発見当時は、やっと人が通れる程度の入口で、腹ばいや腰を曲げないと通れない場所が多かったとのこと。その後、観光地として昭和初期に一般開放されました。桃太郎伝説では、犬、猿、雉が桃太郎のお供として鬼退治にやってきましたが、現在の洞窟も犬の同伴が許されています。

伝説の島々

桃太郎伝説

高松港の沖合に浮かぶ女木島には、弥生時代の遺跡や古墳時代後期である五世紀ころの「円山古墳」が残されています。この古墳からは、高松市においては最大という石棺が発見され、刀や金製のハート型の耳飾りなどの副葬品が出土しました。

この島の別名は「鬼ヶ島」。山頂近くに広がる大洞窟は、郷土史家の橋本仙太郎によって桃太郎伝説ゆかりの洞窟であると発表されました。対岸の高松市には、鬼無をはじめ桃太郎にちなんだ幾つもの地名が残されています。

一説には、桃太郎伝説は古代の物語につなが

かは、訪れる人もない」と記されています。また、島の伝説によれば、家臣として京都からやって来た三宅重成の娘が、上皇の寵愛を受けて、重丸君を生んだと伝えられ、無事十九歳で元服した皇子は三宅左京太夫重行と名を改めたということです。

なお直島は、寛文十二年（一六七二）に幕府の天領となり、一時高松藩の預り地となりましたが、主には倉敷代官所の支配を受け、代々、三宅家が庄屋を務めてきました。

アートの町並みと高原氏の城跡

近衛家の荘園

保元の乱で勝利した藤原忠通を本流として分家した「五摂家」が、有力な貴族として力を持つこととなり、その一つの近衛家が直島を荘園としました。鎌倉時代の建長五年（一二五三）に作成された『近衛家目録』によれば、直島と共に塩飽や豊島も荘園であったことが分かります。当時の直島は、小豆島と共に備前国児島郡に属していました。

高原氏の時代

江戸時代前記に記されたという『南海治乱記』には、「北条時頼執権のころ、備後と讃岐の間に海賊が横行していたので、讃岐国香川郡の



豊玉姫神社からの眺望
男木島の豊玉姫神社は、島内を一望できる高台にあり、境内からは家並みの向こうに瀬戸の海が見えます。



男木島の加茂神社
豊玉姫を失った山幸彦をまつ神社。縁に包まれ、波音が近くに聞こえます。本殿の横には、桃太郎と鬼の彫り物があります。



神井戸 (しんど)
男木島にある豊玉姫と山幸彦が出会ったと伝わる場所です。

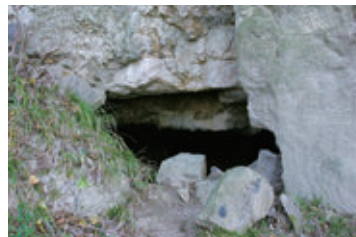


豊玉依姫神社
女木島の東浦地区の八幡神社の隣。鳥居の額に「豊玉依姫大明神」とあり、石のほこらがあります。



豊玉姫神社
男木島の高台にあり、境内には高松市の名木「ウバメガシ」の巨木があります。

男木島のジイの穴
コミ山の山頂付近にある洞窟。桃太郎伝説の副大将が逃げ込んだ穴といわれています。



安産の神様・豊玉姫伝説の島

り、稚武彦命の海賊退治の話ではないかと推測されています。『日本書紀』によれば、稚武彦命は孝靈天皇の皇子で、姉は倭迹迹日百襲姫命。兄の彦五十狹芹彦命は吉備津彦命とも呼ばれ、国内を平定する四道將軍の一人として、西道（現在の山陽あたり）に派遣されました。倭迹迹日百襲姫命は、讃岐の地に住んでいたことがあり、高松市の一宮神社には吉備津彦命と共にまつられています。その弟である稚武彦命が、鬼のような海賊を退治した話が讃岐の桃太郎伝説として語り継がれてきたというわけです。はるかな昔に人の手が入ったとされる島の洞窟には、今なお古代ロマンが眠っているのです。

女木島からさらに北の沖合には、男木島があります。男木、女木、両島で雌雄島と呼ばれていた時代もありました。鎌倉時代の雌雄島は香西氏の領地でしたが、やがて直島とともに高原氏の領地となり、その後、幕府の直轄地となります。その時代には「直島三力島」と呼ばれ、倉

敷代官所の支配や高松藩領など、幾度か支配者が変わりました。幕末は備中倉敷代官の支配下にあり、それぞれ、庄屋と組頭を置いて政治を行ったということです。

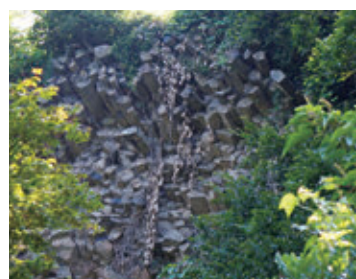
この男木島には、『古事記』などに記されている「海幸彦・山幸彦」の伝説が伝わり、豊玉姫をまつる「豊玉姫神社」と山幸彦（彦火火出見命）をまつる「加茂神社」があります。豊玉姫神社は安産の神様として知られ、神具の子安貝でお酒を飲むと安産まがいなしといわれ、近隣の島々からも参拝の人が訪れていました。

神話に登場する豊玉姫は、綿津見の宮（海の宮殿）に住んでいました。そこに海幸彦の釣針をなくした山幸彦がやってきて、恋に落ちます。山幸彦が釣針を落とした場所は大槌と小槌の

島の間、困り果てた山幸彦の前に神様が現れ、ここから東に行くと島があり、探していた釣針があると教えたということです。

やがて姫は身ごもり、出産の日を迎えますが、決して産屋をのぞかないでくださいと山幸彦に約束させました。ところが、山幸彦は部屋をのぞき、ワニの姿になった豊玉姫を見てしまいます。そこで、豊玉姫は、もう一緒に暮らせない、と、綿津見の国に帰ってしまいました。

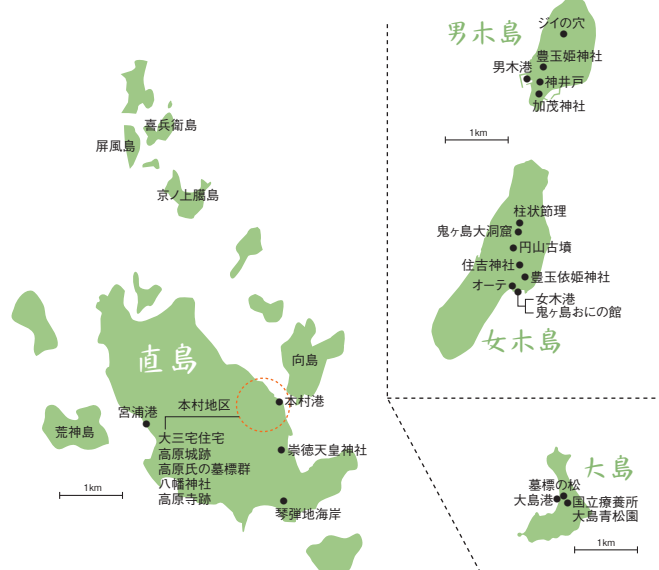
島の伝説によると、豊玉姫は妹の玉依姫に養育を頼み、その玉依姫は女木島に渡って子どもを育て、豊玉依姫神社の祭神となったということです。



女木島の柱状節理
鬼の洞窟出口のすぐ近くには、今から500万年前の噴火によってできたという柱状節理を見ることができま。



鬼ヶ島おにの館
鬼の資料館もある島の総合案内所。鬼の世界にどっぷり浸れます。
高松市女木町15-22
☎087-873-0728
[休]年中無休
[時]8:00~17:30



島の暮らしと石積み

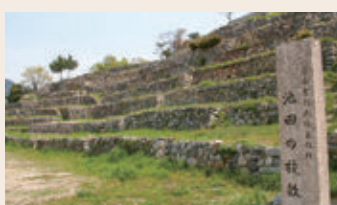
冬の女木島では「オトシ」と呼ばれる北西の季節風が山にあたり、海岸に吹き下ろします。その風は波を巻き上げ、海岸沿いの家はしぶきを浴びることに。さらに、霧状となった海水は家の中まで入ってくるのです。これを防ぐために、屋根まで届くような「オーテ」を築きました。高さは三、四メートルほど、長さは十五から二十メートルのものが多く、女木島の安山岩や直島、庵治の花こう岩、大洞窟の石も使われています。男木島では、平地が少ないため、石垣を積み上げた土地に家を建てました。その石は、花こう岩類のほかに、ジイの穴でも採掘できる玄武岩などが見られます。

塩飽諸島の中でも石垣の島として知られているのが高見島。浦集落は、讃岐岩質安山岩の野面積みを主体としていますが、花こう岩の切石を使った立派な石垣も見え、高度な石積み技術を持った島であることがうかがえます。塩飽諸島の一つ広島は、青木石の産地として知られ、立石集落にある尾上邸の石垣は青木石で積まれています。また、採石が盛んであった樫石島や与島でも島の石で築いた石垣があります。

観音寺市の伊吹島では、真浦などで島の安山岩の切石による石垣を見ることが出来ます。

小豆島では、イノシシ対策に築かれたという「猪鹿垣」という石積み、各所に残されています。明和三年（一七六六）以前から造られ、小豆島全土で全長およそ一二〇キロメートルにもなるそうです。また、池田にある「池田の棧敷」（国重要有形民俗文化財）は、亀山八幡宮の秋の例祭で神輿や太鼓台を見物するために設けられた石垣づくりのものです。文化九年（一八二二）以前に造られました。

豊島では、唐櫃の集落などで「矢羽積」の石垣が美しい文様を見せてくれます。これには、板状摂理が発達した讃岐岩質安山岩が使われています。



小豆島の野天棧敷 (池田の棧敷)



豊島の矢羽積



広島尾上邸



小豆島の猪鹿垣



女木島のオーテ



男木島の石垣

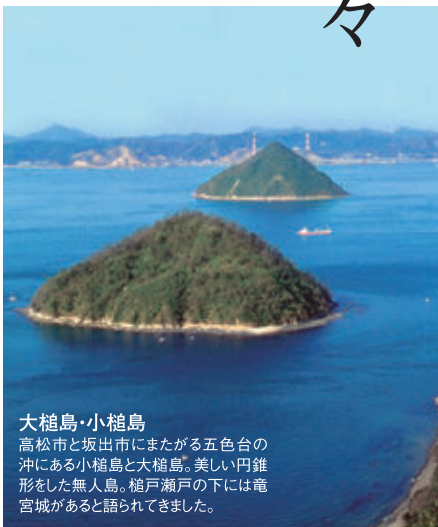
塩飽と西讃の島々

讃留霊王伝説と万葉の島

讃岐にとどまる王の物語

讃岐の小山のような「小槌島」は、高松市と坂出市にまたがる大崎の鼻のすぐ前にあり、その北に浮かぶ「大槌島」（北半分は玉野市）との間は、槌戸瀬戸と呼ばれています。

ここを舞台とした伝説が「讃留霊王の悪魚退治」。丸亀市飯山町の「讃留霊王神社」にちなんだ伝説によれば、景行天皇の時代（九十四年頃）、船や人をもみ込み暴れていた悪魚を退治する命を受けた、日本武尊の皇子である武甕王が瀬戸内海にやって来ます。王の軍船は槌戸瀬戸で悪魚にのみ込まれましたが、どうにか脱出することができ、見事に悪魚退治を果たしました。その功績によって、武甕王は、讃岐の地を与えられ、城山（現在の坂出市と丸亀市）に城を築き讃留霊王となって、この地を治めたということです。五色台にある白峯寺の縁起によれば、「槌戸瀬戸」は、讃岐に流された崇徳上皇が都から送り返されてきた「五部大乘経」に血書し、投げ入れた海でもあります。崇徳上皇が法華経・華嚴経・涅槃経・大集経・大品般若経を自らし



大槌島・小槌島
高松市と坂出市にまたがる五色台の沖にある小槌島と大槌島。美しい円錐形をした無人島。槌戸瀬戸の下には竜宮城があると語られてきました。

たため都へ送ったところ、呪いが込められているのではと疑われ、納めてはもらえませんでした。それに激怒し槌戸瀬戸に投げ捨てると、海上は火が燃えるように見え、童子が現れて海の中に経典を納めたと伝えられています。

柿本人麻呂が訪れた島

坂出市にある沙弥島は、塩飽諸島の一つ。今では埋め立てられ陸続きになりましたが、七世紀から八世紀にかけて、万葉の歌人が活躍する時代には、柿本人麻呂がこの島を訪れ、歌を残しています。



柿本人麻呂の石碑
沙弥島の北部には作家の中河与一が建立したという「柿本人麻呂」があります。

れる人を視て」という人麻呂の歌があり、この狹々島は沙弥島のことであると伝わります。人麻呂は地方を点々とした役人であったといわれ、古くは瀬戸内海を行くのに、四国に近い航路も頻繁に利用されていたことが推測されます。

島ゆかりの名僧たち

大師誕生の地

空海（弘法大師）に代表される「大師」は、徳の高い僧侶に対し、その死後に朝廷から贈られる称号です。讃岐からは、五人（弘法大師・智証大師・道興大師・法光大師・理源大師）の大師が誕生しました。

四国八十八ヶ所霊場は、空海が開いたとされますが、瀬戸内海の島々にも大師伝説が残されています。空海が心経山で修行をしたと伝わる広島、唐に向かう途中で立ち寄ったという本島、空海が光を放つ不思議な「異木（いば

心経山

丸亀市の広島には、空海が修行をしたという山があり、巨岩がそびえています。



檀石島のミニ石仏霊場
丸亀市本島や手島、多度津町の高見島、三豊市の栗島や観音寺市の伊吹島にもミニ四国霊場があり、春などには接待がある「お大師参り」が行われる島もあります。坂出市檀石島では、架橋により札所の石仏が一方所に集められました。島の人々の温かいお接待もある島四国やお大師参り、今では島外の人々にも人気です。

く」を拾ったことから「異木島」がなまって島名になったと伝わる伊吹島、空海開基という「大聖寺」がある高見島など。また、各島には近世になって「島四国」と呼ばれるミニ八十八ヶ所が整えられ、「お大師まいり」などが行われてきました。

平安時代の高僧で醍醐寺の開祖である聖宝（理源大師）の誕生地は、塩飽諸島の本島とも沙弥島ともいわれています。『醍醐根本僧正略伝』によると、父は天智天皇の五代目にあたる皇子葛声王、母は綾子姫。九州に流された葛声王を追って大宰府に行く途中の綾子姫が本島に立ち寄り、天長九年（八三三）に俗名恒蔭王、後の聖宝が生まれました。空海の実弟である真雅法光大師）について出家し、仏弟子として「聖宝」を名乗り、諸国を巡り、厳しい山岳修行を経て、修験道一派を興したということです。

また、坂出市の沙弥島には、聖宝が亡くなった母や民衆のためにお堂を建てたと伝わり、寛文十一年（一六七二）に再建されたという理源大師堂があります。沙弥島港の入口には、聖宝の胎盤を埋めたという「えなが岩」が残されています。

承元元年（二二〇七）には、法然上人が四国に流され、塩飽荘の地頭である高階保遠の館に身を寄せました。保遠が法然のために建てた本島の草庵が、現在の専称寺の始まりといわれています。



源平合戦ゆかりの島々

平安時代、海賊の出没によって頭を悩ました朝廷は、平忠盛一族にその鎮圧を命じ、これにより平氏は瀬戸内に強力な地盤を築きました。そのため、後に平氏が源氏との戦いに劣勢となった際、ゆかりの深い瀬戸内海沿岸や島々を頼って落ち延びたともいわれています。

寿永二年（一一八三）、讃岐国屋島に陣を敷いた平氏は、一度は摂津国福原に帰るものの再び屋島に陣取ります。義経率いる源氏軍との間で源平屋島合戦が起こったのは元暦二年（一一八五）。そして、源氏軍に海上に追いついて平氏は、最後の拠点である長門国彦島に逃れるのです。そのため、瀬戸の島々には、源平合戦ゆかりの地名や史跡、またその伝説が残されました。

女木島は、那須与一が射た扇の壊れた残りが流れ着いたので、「めぎ（めげた）壊れた」という意味の島の名になったと伝わり、男木島はその扇が流れ着いたので、「おぎ（おおぎ）」になったともいわれています。

高松市庵治港の北西に浮かぶ大島は、国立療養所大島青松園があることで知られています。ここには「基標の松」があり、敗れた平氏の武将の亡骸や遺品を埋葬した際、墓標として植えられたと語られてきました。

塩飽の島々も平氏とは縁が深く、本島の徳玉神社には安徳天皇がまつられています。また、安徳天皇の乳母のものと伝わる墓や、平氏ゆかりの弁財天（長徳寺）が残されています。

瀬戸大橋架橋の島・檀石島には平家の落人が草履を脱いだという石や宝物を隠したという巨石があり、島民は追っ手から三人の姫を守ったと語られてきました。その三人をまつるのが三社大明神です。

平家の落人が住みついて集落ができたといわれ、鎧が埋まっていたという鎧塚のある手島、備中国水島（現在の倉敷市玉島）における「源平水島合戦」で流れ着いた死者を弔った墓が残る小手島や広島など、島々には平家伝説が尽きません。



基標の松（大島）



徳玉神社（本島）



正覚院（しょうがくいん）
本島にある「正覚院」は、別名「山寺」と呼ばれ、参道には空海の作と伝えられる磨崖仏の水不動があります。また、聖宝誕生の地ともいわれおり、「誕生塚」や聖宝の母綾子姫の墓などもあります。

専称寺

法然上人ゆかりの専称寺は、本島笠島集落の東山にある浄土宗の寺。天正6年（1578）に完れた庵を建て替えたといわれています。



理源大師堂

沙弥島にある理源大師堂。島には人が住まなくなり、一度は荒れ果ててしまいましたが、寛文11年（1671）に再建されたといわれています。



塩飽衆の島

高度な技で船を操る

香川県と岡山県に挟まれた瀬戸内海に点在する二十八の島々が「塩飽諸島」。現在は坂口市・丸亀市、多度津町に所属しています。

その名の由来は、「塩焼く」とも「潮湧く」ともいわれてきました。瀬戸内海の中でも本州と四国が最も接近した海域で、浅瀬や岩場が多く、複雑な潮流に鍛えられた島人は、自然と高い操船技術を身につけるようになったと推測されます。

塩飽諸島の中心である本島は、平安時代後期には摂関家の所領となり、鎌倉期には直島などと同じ近衛家の荘園でした。そして、塩飽衆の名前が歴史上に大きく登場してくるのは南北朝時代。塩飽の島々は北朝方の海上拠点としての役割を果たし、塩飽衆は備讃瀬戸を中心に勢力を広げていきます。

頼もしき輸送船団

室町時代になると、瀬戸内海沿岸から畿内へ、大小の船で大量の物資が運ばれました。その中でも、特に活躍したのが塩飽船です。

室町時代中期には周防の大内氏が勢力を伸ばし、村上水軍として名高い三島村上氏（能島・来島・因島）を味方につけるとともに塩飽諸島に力を及ぼしてきました。塩飽の人々



重要伝統的建造物群保存地区の笠島集落
塩飽衆、塩飽廻船の本拠地として栄えた本島の笠島集落。細く入り組んだ路地と美しい町並みが続きます。建物は江戸時代のもものが13棟、明治時代のもものが20棟ほど残されています。

は、明との貿易をする大内氏の警護にあたり、永正十七年（一五二〇）、大陸出兵の際には兵船を出しました。元龜二年（一五七二）には、備前国児島における三好氏と毛利氏との合戦で、阿波・讃岐衆を率いる三好軍の渡海役を担いました。また、毛利氏が能島を攻めた際には村上氏へ兵糧を届けています。戦国期の塩飽衆は、水軍というより、兵船を提供し、将兵や軍需物資の輸送に従事していました。

朱印状が伝わる島

天正五年（一五七七）、織田信長は天下統一を図り、石山本願寺を攻めるにあたり、瀬戸内海の制海権を掌握するために、堺（港）へ出入りする塩飽船の安全を保障する朱印状を出しました。その後、豊臣秀吉の家臣である小西行長が塩飽を統治し、同十四年（一五六六）

のが、名字帯刀を許された「年寄」でした。

「人名」の役割には二つあり、有事には幕府の水軍として輸送船団となること、平時には城米（天領からの年貢米）の輸送、長崎奉行の送迎など、御用船方としての役目を果たすことでした。

人名による統治

には九州の島津氏を攻めるにあたり、秀吉から五十人乗りの船十隻と五十人の水主を出すように命じた朱印状が下されました。慶長五年（一六〇〇）には、徳川家康から島の船方六五〇人に二五〇石の領有を認めた朱印状が下されています。



織田信長の朱印状
「塩飽人名共有文書」の一つ。近年の研究では、塩飽船の堺への航行を許すが、勝手な行動をすれば成敗するという解釈もあります。
(写真提供:丸亀市立資料館)

人名墓

本島には、塩飽人名の年寄を務めた人々の大きな墓が残っています。



散し、地区ごとに年番、庄屋、組頭があり、これを統括する

江戸時代になると、「人名」と呼ばれる独特の立場を持つ人々による統治が行われます。六五〇人というのは、御用水主の人数で、十一の島（本島、広島、手島、佐柳島、高見島、牛島、沙弥島、瀬居島、与島、岩黒島、櫃石島）で二十一カ所に分

木鳥（こがらす）神社の石鳥居
本島、泊の海岸にある木鳥神社の鳥居は、寛永4年（1627）、年寄宮本伝太夫道意（でんだゆうどうい）の子半右衛門正信が建てたもので、薩摩の石工と地元



櫃石島の制札場（せいさつば）
塩飽の島々にはかつて24の制札場があり、勤番所からのお祭れ書などが掲示されていました。坂出市の櫃石島では、人々が集まる大井戸の横に制札場があります。また、本島の木鳥神社の境内や手島にも残されています。



塩飽勤番所跡〈国史跡〉

最初は年寄と呼ばれる船方衆の代表者4人が、自宅を役所として交代で政務を執っていましたが、寛政元年（1789）には塩飽全島から3人の年寄を選び直し、同10年（1798）に政務を行う場所として勤番所が建築されました。朱印状や咸臨丸に乗船した塩飽水夫ゆかりの品などが公開、展示され、塩飽の歴史を感じることができます。
丸亀市本島町泊81 ☎0877-27-3540（塩飽勤番所顕彰保存会）
【休】月曜日、年末年始（12/29～1/3）【時】9:00～16:00



島々の石さんぽ

旧石器時代のサヌカイトにはじまり瀬戸内海の島々は、個性的な石や銘石に恵まれてきました。加工しやすい豊島石などは、庵治石などが重宝される以前から盛んに使われています。また、大坂城築城の際には、小豆島とともに塩飽諸島からも多くの石が切り出されました。その石工の技は、その後の讃岐石材界の基礎となるものだったことでしょう。時代を見つめてきた島々の石。その変わらぬ姿を訪ねます。

広島県の青木石

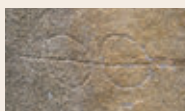
丸亀市の沖合に浮かぶ塩飽諸島最大の島・広島。この島は、「青木石」と呼ばれる黒雲母花こう岩の産地です。この「青木石」、古くは大坂城築城の際に積み出されたとされています。広島県の王頭山山頂付近には、「王頭砂漠」と呼ばれる不思議な風景が広がっています。

広島県の王頭（おうとう）砂漠。昔、その場所に寺があり、修行を求めて来たお坊さんを和尚さんが拒否すると、お坊さんは口から火を吐いて、寺を焼き尽くし、その後は木も草も生えない砂漠になったという伝説があります。



くし団子刻印

櫃石島のキイキ石、岩黒島の黒い石
瀬戸大橋架橋の島、坂出市の櫃石島。その名の通り櫃を立てたような巨石「櫃岩」が島の名前の由来です。また、王子神社には、「キイキ石」と呼ばれる巨石が迫っています。櫃石島にも「銭嚙石」などの大坂城の残石が多くあり、くし団子刻印があるので、だんご岩とも呼ばれています。



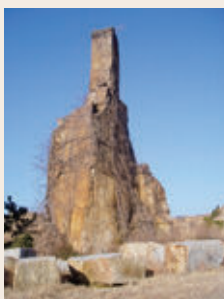
同じく架橋の島・岩黒島の北側には、黒い岩と黒い砂浜があります。砂鉄が多く含まれているそうです。



キイキ石
櫃石島の「キイキ石」は、お伊勢参りに行った島の人が珍しい石だと思い、たもとに入れて帰ったところ、「キイキ」と鳴きながら大きくなったという伝説があります。

与島や小与島の与島石

同じく架橋の島、与島もかつては花こう岩を産出する石材の島として知られていました。与島の石は鉄分を多く含み、茶色っぽく見えます。与島から船で渡ると小与島も採石の島として知られ、両島から採れる石は与島石と呼ばれていました。



採石の島として知られ、両島から採れる石は与島石と呼ばれていました。

伊吹島の奇石

観音寺港の沖合、約一〇キロに浮かぶ香川県最西端の有人島・伊吹島。約一四〇〇万年前の火山活動でできた讃岐岩質安山岩類（両輝石安山岩）からできた



台地状の島で、瀬戸内火山岩類（讃岐層群）の西端の島でもあります。山頂にある巨石「鉄砲石」や波の侵食を受けてできた「石門」など、見応えのある石の風景があります。

海に生きた人
陸に残った人

城米御用船として

幕府の命を受けた河村瑞賢すいげんは、寛文十一年（二六七二）に東廻り、翌年に西廻りの航路を開発し、西廻りの米を運ぶ船として、塩飽や直島の船も参加することになりました。この後、塩飽廻船の多くは城米を運ぶため幕府に直接雇われることとなり、城米御用船として活躍します。その最盛期は、延宝年間（一六七三～一六八二）から享保年間（一七一六～一七三六）の中頃にかけてでした。

ところが、この繁栄も長くは続きませんでした。商人が力を付け廻船業に關わってくるようになると、塩飽廻船の仕事は脅かされてきました。これまでの城米船での運搬から廻船問屋に任せるといふ請負方式に変わり、十八世紀後半には塩飽の廻船業は衰退していきます。



牛島の極楽寺梵鐘
(ごくらじぼんしゅう)
江戸時代、廻船業で栄えた豪商・丸尾五左衛門(まるおござえもん)。牛島にはその屋敷跡があり、極楽寺には、丸尾家歴代の墓と五左衛門の伝説が残る「無間(むげん)の鐘」があります。



粟島伊勢神宮奉納船絵馬「住吉丸」（県有形民俗文化財）
瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

粟島の伊勢神社には、多数の船絵馬が奉納されていました。奉納年代は天保年間（1830～1844）頃が多く、志々島の伊勢屋をはじめ、大坂や堺、函館からのものもありました。この絵馬は、輸入した生糸や絹織物を江戸に運ぶ糸荷廻船「住吉丸」で、寄港したことを示しています。

志々島では、そんな船問屋の二つ伊勢屋が、「志々の伊勢屋か、伊勢屋の志々か」とうたわれるほど隆盛を極めました。

豊臣秀吉の時
代から船大工の腕の良さが知られる本島などでは、塩飽廻船の衰退に伴い、家大工や宮大工になる者が多く、

あわしま
栗島廻船の台頭と塩飽大工

塩飽廻船の衰退に反して宝暦年間（二七五一―二七六四）になると、粟島廻船が力を増してきました。安永五年（二七七六）当時の越後新発田藩大坂廻米船の資料によると、塩飽広島五隻を上回り、粟島廻船が十九隻も記されています。各地に寄進された鳥居などでも、その繁栄ぶりを見ることが出来ます。

しかし、文政年間（一八一八～一八三〇）以降になると他国船との競争に敗れ、幕末期には粟島船籍の廻船もなくなつたとされています。その一方で、粟島は北前船の寄港地として栄え、船主たちは問屋や仲買人などになつて交易に関わりました。また、隣の志々島では、そんな



粟島伊勢神社奉納船絵馬「住吉丸」〈県有形民俗文化財〉
瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

粟島の伊勢神社には、多数の船絵馬が奉納されていました。奉納年代は天保年間（1830～1844）頃が多く、志々島の伊勢屋をはじめ、大坂や堺、函館からのものもありました。この絵馬は、輸入した生糸や絹織物を江戸に運ぶ糸荷廻船「住吉丸」で、粟島に寄港したことを示しています。

屋が、「志々の伊勢屋か、伊勢屋の志々か」とうたわれるほど隆盛を極めました。

豊臣秀吉の時
代から船大工の腕の良さが知られる本島などでは、塩飽廻船の衰退に伴い、家大工や宮大工になる者が多く、

かんりん
咸臨丸でアメリカへ



**三所(さんしょ)神社の
大工彫刻**
本島にある三所神社。本殿は
天保6年(1835)に建てたと伝
わり、塩飽大工によるその彫刻
は島内一ともいわれています。



本島の夫婦倉(めおとぐら)
江戸末期につくられた二連式の倉。塩飽大工、物部喜代七(ものべきよひち)が棟りようとなって建てたと伝わります。

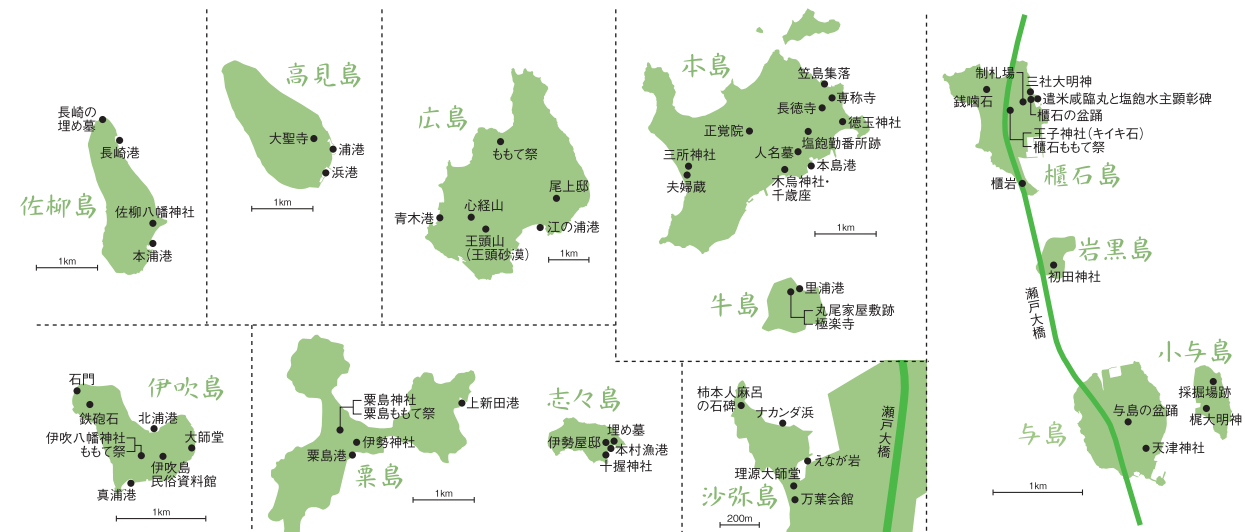
嘉永六年（一八五三）、アメリカ大統領の親書を携えたペリー提督が浦賀に入港。これにより、徳川幕府は鎖国を解き、開国への歩みを始めます。そして、海軍を創設することになり、浦賀において我が国最初の洋式帆船鳳凰丸が建造されました。安政二年（一八五五）、長崎に海軍伝習所を開設、観光丸や咸臨丸を練習船とし、オランダ人から洋式海軍の伝習を受けます。このとき、軍艦の水夫として徴用された多くが、塩飽の人々でした。嘉永六年（一八五三）に大坂奉行所から、水夫三十人の要請があつてからの六年間で延べ五八二人、全ての期間中では延べ一〇〇〇人もの塩飽の人々が海軍の訓練を受けたということです。

感動秘話も眠る塩飽衆の歴史

坂出市役所 与島出張所 所長
濱本 敏広さん



「遣米咸臨丸と塩飽水主顕彰碑」(櫃石島)



鳥山 両墓制の浜

土葬が普通であつた昔、香川県の西部や小豆島、広島、本島、粟島、志々島、佐柳島などの島しょ部では、「両墓制」と呼ばれる埋め墓と詣り墓の二つの墓をつくる地域がありました。今でも島しょ部の一部に、その名残を見ることが出来ます。



佐柳島長崎の埋め墓
(県有形民俗文化財)
スバナ(州鼻)という海に突き出た長い州の上に、「サンマイ」と呼ばれる埋め墓があります。浜辺から拾ってきたという黒い石が一面に敷き詰められ、木偶(デウ)人形を立てるという、全国的にも珍しい風習が残されています。



「塩飽大工」と呼ばれ、岡山県の吉備津神社の本殿の修理や拝殿の造営、総社市の備中国分寺の五重塔、善通寺の五重塔の造営など、備讃地域を中心に高い技術を発揮しました。

島歳時記

春

夏

秋

冬

粟島 三月 粟島ももて祭〔県無形民俗文化財〕

本島 三月 お大師参り

小豆島 四月 梶大明神春祭り

与島 四月 三十三観音めぐり

豊島 四月 お大師参り

広島 四月 お大師参り

粟島 四月 島四国八十八ヶ所めぐり

小豆島 四月 西光寺春の大師市

手島 四月 お大師参り

伊吹島 四月 島四国めぐり

小豆島 四月 醬の郷まつり

沙弥島 四月 沙弥島万葉まつり

瀬居島 四月 瀬居島お大師市

小豆島 五月 肥土山農村歌舞伎奉納〔国選択無形民俗文化財〕

伊吹島 六月 伊吹八幡神社の神楽

小豆島 七月 虫送り

本島 七月 虫送り

本島 七月 正覚院夏まつり

志々島 七月 十握神社お祭り

男木島 八月 男木島の夏祭り〔二年に一度〕

女木島 八月 住吉神社の大祭り〔二年に一度〕

小豆島 八月 川めし

小豆島 八月 安田おどり〔県無形民俗文化財〕

小豆島 八月 夜念仏

小豆島 八月 精霊流し

粟島 八月 粟島神社お神楽祭

与島 八月 与島・櫃石の盆踊〔国選択無形民俗文化財〕

手島 八月 お大師参り

小豆島 九月 阿豆枳島神社例大祭

瀬居島 九月 瀬居八幡神社秋祭り

佐柳島 十月 佐柳八幡神社秋祭り

伊吹島 十月 伊吹八幡神社秋祭り

小豆島 十月 中山春日神社奉納農村歌舞伎〔国選択無形民俗文化財〕

直島 十月 八幡神社秋季大祭

向島 十月 荒神社の秋祭り

岩黒島 十月 初田神社の秋祭り

小豆島 十月 秋の太鼓まつり

豊島 十月 いろは石ウオーク

小豆島 十月 寒霞溪もみじ茶会

小豆島 十月 西光寺霜月大師市

櫃石島 一月 櫃石ももて祭〔県無形民俗文化財〕

小豆島 一月 小豆島霊場開き

広島 二月 ももて祭

伊吹島 二月 ももて祭

島四国八十八ヶ所めぐり(粟島)

4月29日、粟島の八十八ヶ所をめぐるお遍路さんに、島の人々からお菓子やところてんのお接待があります。春は他の島々でも、「お大師参り」や「島四国めぐり」、「大師市」など類似的行事が盛んに行われる季節です。



伊吹八幡神社の神楽(伊吹島)

伊吹八幡神社で行われる夏越しの神事。盛夏の無病息災を祈り、茅の輪をくぐります。昼には八幡神社、夜には荒神社で、江戸時代から続くという神楽が奉納されます。



川めし(小豆島)

別当川の河原に集まり、五目飯を炊き、柿の葉などの木の葉に乗せてお供えし、「餓鬼」と呼ばれる無縁仏を供養する行事です。「盆釜」「餓鬼めし」などとも呼ばれ、「川めし」を食べると夏の病氣にかからないといわれてきました。



与島・櫃石の盆踊

8月14日の夜に行われる与島と櫃石島の盆踊りは、唄(口説き)と太鼓に合わせ、古風なふりで踊られます。新仏の家族らはお位牌を背負って踊り、与島では「仏踊り」、櫃石島では「新霊踊り」「精霊踊り」などとも呼ばれます。(国選択無形民俗文化財)



土庄八幡神社

男木島の夏祭り(男木島)

男木島の夏祭りは、豊玉姫神社と加茂神社で行われ、浦安の舞や獅子舞、屋台奉納などがあります。太鼓台が海に入ること知られる女木島の住吉神社の大祭りと交互に行われます。



正覚院夏まつり(本島)

「山寺さん」の愛称で知られる正覚院で行われる夏まつり。山伏が無病息災を願う熱湯加持や荒行の火渡りが有名。福引大会やそうめんの接待などもあり、境内はひととき華やかに盛り上がりします。



農村歌舞伎(小豆島)

役者、太夫、裏方すべてを地元住民が行う小豆島の農村歌舞伎。その昔は多くの場所で行われていましたが、現在では肥土山離宮八幡神社の境内で行う「肥土山農村歌舞伎」と、春日神社境内で行う「中山農村歌舞伎」の2つになりました。(国選択無形民俗文化財)



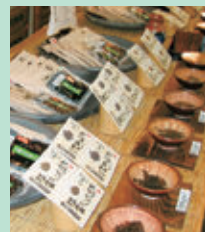
虫送り(本島)

小豆島では肥土山地区と中山地区で行われている「虫送り」。丸亀市本島でも、「泊(とまり)の虫送り」が行われています。松明(たいまつ)で虫を追う小豆島と違い、鉦をたたきながら集落を回り護摩札を立て、最後は虫と書いた帆を上げた舟を海に流します。



虫送り

今に続く島の食文化



つくだ煮

古い木の桶でじっくりと醸す「桶仕込み」をはじめ手間暇掛けてつくる小豆島醤油。その醤油から生まれるのが、味のしみこんだ島の「つくだ煮」。小豆島では戦後生まれの「つくだ煮」ですが、そこには、塩づくりや醤油づくりからつながる長い歴史があるのです。

ごま油

小豆島そうめんづくりに欠かせないごま油。幕末にはその配合が決まられていました。当時から島では、ごまが栽培されていたのです。



茶がゆ

粟島や志々島、高見島、岩黒島などでは、発酵茶の碁石茶を使う伝統料理「茶がゆ」が伝えられてきました。塩気の多い島の井戸水や海水で炊いてもおいしいとのこと。



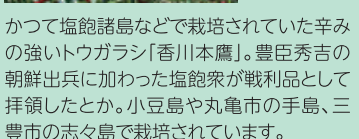
落花生

高松市の女木島、男木島では古くから落花生を栽培してきました。掘りたてを塩ゆでにしたものは絶品。また、乾燥して保存したものは甘く煮て、おせち料理の黒豆の代わりになります。



香川本鷹

かつて塩飽諸島などで栽培されていた辛みの強いトウガラシ「香川本鷹」。豊臣秀吉の朝鮮出兵に加わった塩飽衆が戦利品として拝領したとか。小豆島や丸亀市の手島、三豊市の志々島で栽培されています。



伊吹島のイリコ

観音寺市の伊吹島周辺は、カタクチイワシの豊かな漁場。新鮮さを保つ数々の工夫がされており、さぬきうどんのだしに欠かせないおいしいイリコができあがります。



島へのアクセスガイド

高松(高松港・高松東港)から

- ① 高松⇄直島(宮浦)
四国汽船 ☎087-821-5100
- ④ 高松⇄直島(本村)⇄豊島(家浦)
豊島フェリー ☎087-851-4491
- ⑥ 高松⇄女木島⇄男木島
雌雄島海運 ☎087-721-7921
- ⑦ 高松⇄小豆島(土庄)
小豆島フェリー ☎087-822-4383
(高速艇) ☎087-821-9436
- ⑧ 高松⇄小豆島(池田)
国際フェリー ☎0879-75-0405
- ⑨ 高松⇄小豆島(草壁)
内海フェリー ☎0879-82-1080
- ⑫ 高松⇄小豆島(坂手)
高松(東港)⇄小豆島(坂手)
ジャンボフェリー ☎087-811-6688
- ⑬ 高松⇄大島
国立療養所大島青松園 ☎087-871-3131
※施設見学等、事前に了承を得ている場合に乗船可能。

丸亀港から

- ⑮ 丸亀⇄牛島⇄本島
本島汽船 ☎0877-22-2782
- ⑯ 丸亀⇄広島(江の浦)⇄広島(青木)⇄小手島⇄手島
備讃フェリー ☎0877-22-3318

多度津港から

- ⑰ 多度津⇄高見島⇄佐柳島(本浦)⇄佐柳島(長崎)
三洋汽船 ☎0877-32-2528

詫間(須田港・宮の下港)から

- ⑱ 詫間町(須田)⇄栗島⇄栗島(上新田)⇄志々島⇄
詫間町(宮の下)
栗島汽船 ☎0875-83-3204

観音寺港から

- ⑲ 観音寺⇄伊吹島
観音寺伊吹丸事務所 ☎0875-25-4558

県外から

- ② 宇野⇄直島(宮浦)
四国汽船 ☎087-821-5100
- ③ 宇野⇄直島(本村)
四国汽船 ☎087-821-5100
- ⑤ 宇野⇄豊島(家浦)⇄豊島(唐櫃)⇄小豆島(土庄)
小豆島豊島フェリー ☎0879-62-1348
- ⑩ 神戸(三宮新港)⇄小豆島(坂手)
ジャンボフェリー ☎078-327-3322
- ⑪ 姫路⇄小豆島(福田)
小豆島フェリー ☎0879-84-2220
- ⑫ 岡山(新岡山港)⇄小豆島(土庄)
両備フェリー ☎086-274-1222
四国フェリー ☎0879-62-0875
- ⑬ 岡山(日生)⇄小豆島(大部)
瀬戸内観光汽船 ☎0869-72-0698

路線バス

- ② JR坂出駅⇄与島⇄岩黒島⇄櫃石島⇄
JR児島駅
琴参バス ☎0877-22-9191／
下電バス ☎086-472-2811

島内でのアクセスガイド

バス

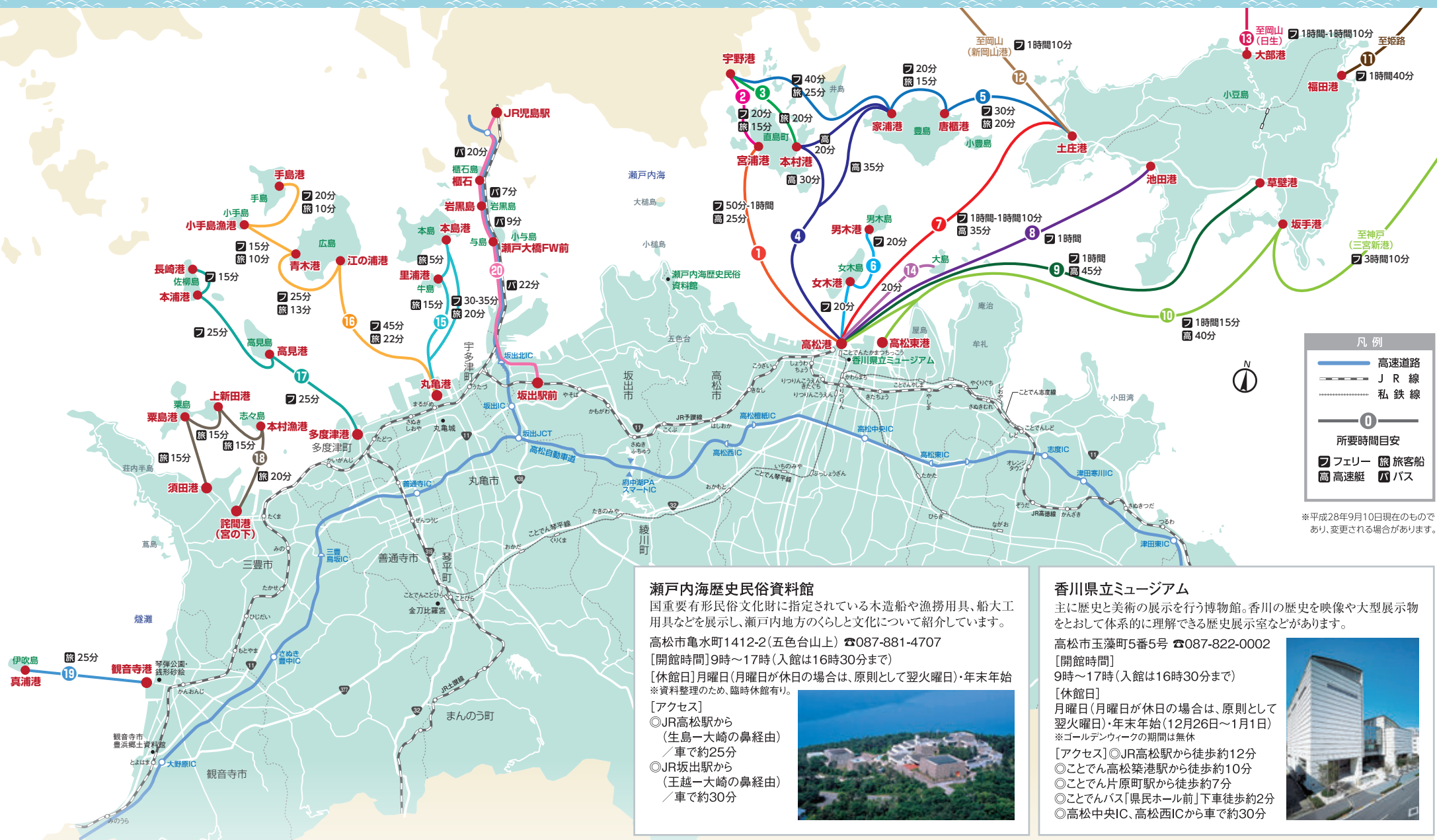
- [小豆島] 小豆島オリブバス株式会社 ☎0879-62-0171
[豊 島] 豊島シャトルバス ☎0879-62-7014 (土庄町役場企画課)
[直 島] 直島町営バス ☎087-892-2299 (NPO法人直島町観光協会)
[女木島] 鬼ヶ島観光自動車株式会社 ☎087-873-0277
[沙弥島] 坂出市営バス ☎0877-44-5009 (坂出市環境交通課)
[与 島] 琴参バス株式会社 ☎0877-22-9191
[本 島] 本島コミュニティバス ☎0877-22-9191 (琴参バス株式会社(委託))
[広 島] 広島コミュニティバス ☎0877-29-2332 (NPO法人石の里広島(委託))

タクシー

- [小豆島] 小豆島交通 ☎0879-62-1203 (土庄)、かんかけタクシー ☎0879-82-2288 (草壁)
[豊 島] 秋山タクシー ☎0879-68-2111 (要予約)
[直 島] 直島タクシー ☎087-892-3036 (要予約) ※ジャンボタクシーのみ

レンタサイクル利用可の島

[小豆島] (バイク有り)、[豊島]、[直島] (バイク有り)、[女木島]、[男木島]、[本島]、[栗島]、[広島]



凡 例	
	高速道路
	J R 線
	私 鉄 線
	所要時間目安
	フェリー
	旅客船
	高速艇
	バス

※平成28年9月10日現在のものであり、変更される場合があります。

瀬戸内海歴史民俗資料館

国重要有形民俗文化財に指定されている木造船や漁撈用具、船大工用具などを展示し、瀬戸内地方のくらしと文化について紹介しています。

高松市亀水町1412-2(五色台山上) ☎087-881-4707

[開館時間] 9時～17時(入館は16時30分まで)

[休館日] 月曜日(月曜日が休日の場合は、原則として翌火曜日)・年末年始
※資料整理のため、臨時休館有り。

[アクセス]

- ◎JR高松駅から
(生島一大崎の鼻経由)
／車で約25分
- ◎JR坂出駅から
(王越一大崎の鼻経由)
／車で約30分



香川県立ミュージアム

主に歴史と美術の展示を行う博物館。香川の歴史を映像や大型展示物をとおりて体系的に理解できる歴史展示室などがあります。

高松市玉藻町5番5号 ☎087-822-0002

[開館時間]

9時～17時(入館は16時30分まで)

[休館日]

月曜日(月曜日が休日の場合は、原則として翌火曜日)・年末年始(12月26日～1月1日)
※ゴールデンウィークの期間は無休

[アクセス] ◎JR高松駅から徒歩約12分

◎ことでん高松築港駅から徒歩約10分

◎ことでん片原町駅から徒歩約7分

◎ことでんバス[県民ホール前]下車徒歩約2分

◎高松中央IC、高松西ICから車で約30分



各島の問い合わせ先

- 鬼ヶ島観光協会 ☎087-840-9055 (女木島)
女木コミュニティセンター ☎087-873-0101 (女木島)
男木島観光協会(男木コミュニティセンター内) ☎087-873-0001 (男木島)
NPO法人瀬戸内こえびネットワーク ☎087-813-1741 (大島)
※大島青松園の歴史を学びながらガイドツアーに参加する必要があります
(一社)小豆島観光協会 ☎0879-82-1775 (小豆島・豊島)
NPO法人豊島観光協会 ☎0879-68-3135 (豊島)
NPO法人直島町観光協会 ☎087-892-2299 (直島)

- 坂出市観光協会 ☎0877-45-1122 (沙弥島・瀬居島・与島・岩黒島・櫃石島)
丸亀市観光協会 ☎0877-22-0331 (本島・牛島・広島・手島・小手島)
丸亀市本島市民センター ☎0877-27-3222 (本島・牛島)
丸亀市広島市民センター ☎0877-29-2030 (広島・手島・小手島)
多度津町観光協会 ☎0877-33-1113 (高見島・佐柳島)
三豊市観光協会 ☎0875-56-5880 (栗島・志々島)
観音寺市観光協会 ☎0875-24-2150 (伊吹島)

【監修】香川県立ミュージアム、瀬戸内海歴史民俗資料館、橋詰 茂(徳島文理大学教授)

主な参考文献

- 『香川県の歴史』木原博幸他(山川出版社)
『香川県の歴史散歩』(山川出版社)
『香川県立ミュージアム 歴史展示案内 かがわ今昔 香川の歴史と文化』(香川県立ミュージアム)
『香川県史 年表』(香川県)
『土庄町誌』(土庄町)
『内海町史』(内海町)
『池田町史』(池田町)
『直島町史』(直島町)
『新編 丸亀市史2近世編』(丸亀市)
『丸亀の文化財 第8編』(丸亀市教育委員会)
『塩飽・櫃石島の歴史と民俗』濱本敏広
『高松風土記 市民文庫シリーズ8』(高松市)
『近世の三豊』(三豊市教育委員会)
『香川県の祭り・行事』(香川県教育委員会)
『近世の讃岐』木原博幸編(美巧社)
『近世小豆島社会経済史話 塩・醤油篇』川野正雄
『小豆島石の文化シンポジウム資料集』(小豆島町企画財政課)
『小豆島の大坂城築城石丁場と石材搬出に係わる諸問題』橋詰茂
『讃岐ジオサイト』(香川大学工学部安全システム建設工学科 長谷川研究室) など